

日蓮大聖人御書全集

しゆじょうしんしんごしよ

衆生身心御書

新版
2040
S
2047

衆生身心御書

けんじき

建治期

しゅじょう しんしん

説

たも

しゅじょう

こころ

望

衆生の身心をとかせ給う。その衆生の心にのぞむとて

説

たま

ひと せつ

しゅじょう

こころ

出

とかせ給えば、人の説なれども、衆生の心をいせず。か

故

ずいたい

きよう

名

たと

酒

好

るがゆえに、随他意の経となづけたり。譬えば、さけもこの

親

極

酒

好

愛

こ

まぬおやの、きわめてさけをこのむいとおしき子あり。か

愛

こころ

取

彼

酒

つはいとおしみ、かつは心をとらんがために、かれにさけ

勸

ふぼ

さけ

好

由

をすすめんがために、父母も酒をこのむよしをするなり。

菓

無

こ

ふぼ

さけ

好

たも

思

しかるを、はかなき子は、父母も酒をこのみ給うとおもえ

り。

だいいきよう もう きよう にんてん 説 あごんきよう もう

提謂経と申す経は、人天のことをとけり。阿含経と申す

きよう にじよう 説 たも けごんきよう もう きよう ぼさつ

経は、二乗のことをとかせ給う。華嚴経と申す経は、菩薩

ほうどう ねはんきようとう あごんきよう だいいきよう

のとなり。方等・般若経等は、あるいは阿含経・提謂経に

似 けごんきよう 似 きようぎよう

にたり。あるいは華嚴経にもにたり。これらの経々は、

まつだい ほんぷ 説 そうら ほとけ みごころ かな

末代の凡夫これをよみ候えば仏の御心に叶うらんとは

ぎようじや 思 詳 論 おのれ こころ

行者はおもえども、くわしくこれをろんずれば、己が心

説 おのれ こころ もと 拙 こころ

をよむなり。己が心は本よりつたなき心なれば、はかば

かしきことなし。

ほけきよう

もう

ずいじい

もう

ほとけ

みこころ

説

たも

法華經と申すは、随自意と申して、仏の御心をとかせ給

ほとけ

みこころ

善

こころ

知

ひと

う。仏の御心はよき心なるゆえに、たといしらざる人も、

きよう

読

りやく

量

あき

なか

この經をよみたてまつれば利益はかりなし。麻の中の

蓬

筒

なか

蛇

善

ひと

睦

者

よもぎ、つつの中のくちなわ、よき人にむつぶもの、なに

こころ

振

舞

ことば

直

となけれども心もふるまいも言もなおしくなるなり。

ほけきよう

何

きよう

しん

法華經もかくのごとし。なにとなければどもこの經を信じぬ

ひと

ほとけ

善

思

る人をば、仏のよきものとおぼすなり。

ほけきよう

き

とき

くに

この法華經において、また機により時により国により

弘

ひと

様

々

変

そうろう

とうがく

ひろむる人により、ようようにかわりて候をば、等覺の

ぼさつ

間

知

たま

見

そうろう

菩薩までもこのあわいをばしらせ給わずとみえて候。ま

まつだい

ぼんぷ

計

果

そうろう

して末代の凡夫は、いかでかはからいおおせ候べき。

ひと

使

さんにん

ひとり

極

しかれども、人のつかいに三人あり。一人はきわめて

小賢

ひとり

果無

小賢

ござかしき。一人ははかなくもなし、またござかしからず。

ひとり

極

果

無

確

さんにん

だいいち

一人はきわめてはかなく、たしかなる。この三人に、第一は

過

だいに

だいいち

あやまちなし。第二は、第一ほどこそなければども、すこし

小賢

しゅ

おん言

葉

わたくし

ことば

添

ござかしきゆえに主の御ことばに私の言をそうるゆえ

だいいち

悪

使

だいいち

果

無

に、第一のわるきつかいとなる。第三は、きわめてはかなく

わたくし

ことば

雑

しょうじき

あるゆえに私の言をまじえず、きわめて正直なるゆえ

しゆ ことば 違

だいに

そうろう

に主の言をたがえず。第二よりもよきことにて候。あや

だいいち

勝

そうろう

だいいち

がっし

しえ

まつて第一にもすぐれて候なり。第一をば月支の四依に

譬

だいに

かんど

にんし

だいきん

まつだい

ほんぷ

たとう。第二をば漢土の人師にたとう。第三をば末代の凡夫

なか

ぐち

しょうじき

の中に愚癡にして正直なるものにたとう。

ほとけざいせ

置

ほとけ

ごにゆうめつ

つぎ

ひ

仏在世はしばらくこれをおく。仏の御入滅の次の日よ

いっせんねん

しょうほう

もう

しょうほういっせんねん

ふた

分

り一千年をば正法と申す。この正法一千年を二つにわか

さき

ごひやくねん

あいだ

しょうじようきよう

広

たも

広

つ。前の五百年が間は小乗経ひろまらせ給う。ひろめ

ひとびと

かしよう

あなんとう

のち

ごひやくねん

めみよう

りゆじゆ

し人々は迦葉・阿難等なり。後の五百年は、馬鳴・竜樹・

むじやく

てんじんとう

ごんだいじようきよう

ぐつう

たも

ほけきよう

無著・天親等、権大乘経を弘通せさせ給う。法華経をば

かたはしばかりかける論師もあり、またつやつや申しいだ

ひと

しょうほういつせんねん

のち

ろんじ

なか

しょうぶん

さぬ人もあり。正法一千年より後の論師の中には、少分は

ぶつせつ

似

たぶん

誤

仏説ににたれども、多分をあやまりあり。あやまりなくし

足

かしよう

あなん

めみよう

りゆうじゆ

むじやく

てんじん

てしかもたらざるは、迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親

とう

等なり。

ぞうほう

い

いつせんねん

かんど

ぶつぼう

渡

はじ

像法に入つて一千年、漢土に仏法わたりしかば、始めは

じゆか

そうろう

暇

故

ぶつきよう

うち

儒家と相論せしゆえにいとまなきかのゆえに、仏教の内

だいしよう

ごんじつ

きた

漸

ぶつぼう

ふ

うえ

がつし

大小・権実の沙汰なし。ようやく仏法流布せし上、月支よ

重

重

ぶつぼう

渡

きた

さき

ひとびと

賢

りかさねがさね仏法わたり来るほどに、前の人々はかしこ

のち 渡 ぎょうろん 見 果 無
きよくなれども、後にわたる経論をもつてみれば、はかな

しゅつたい

思

ひとびと

賢

きことも出来す。また、はかなくおもいし人々もかしこく

見

けつく

じゅうりゆう

せんまん

ぎ

みゆることもありき。結句は十流になりて千万の義あり

ぐしや

付

見

ちしや

思

しかば、愚者はいずれにつくべしともみえず。智者とおぼし

ひと

へんしゆう 限

さいごく

いちどう

ぎ

き人は辺執かぎりなし。しかれども、最極は一同の義あり。

いちだいいいち

けごんきよう

だいに

ねはんぎよう

だいさん

ほけきよう

いわゆる、一代第一は華嚴経、第二は涅槃経、第三は法華経。

ぎ

かみいちにん

しもばんみん

いぎ

だいしよう

この義は、上一人より下万民にいたるまで異義なし。大聖

仰

ほううんほつし

ちぞうほつしとう

じつし

ぎいちどう

とあおぎし法雲法師・智蔵法師等の十師の義一同なりしゆ

えなり。

しかるを、ぞうほう なか ちん ずい よ ちぎ もう しょうぞう像法の中の陳・隋の代に、智顛と申す小僧あ

のち ちしやだいし 号 ほうもんおお

り。後には智者大師とごうす。法門多しといえども、せん詮ず

ほつけ ねはん けこんぎよう しょうれつ ひと

るところ、法華・涅槃・華嚴経の勝劣の一つばかりなり。

ちぎほっしい ぶつぽう 逆 うんぬん ちんしゆ

智顛法師云わく「仏法さかさまなり」云々。陳主このこと

糾 なんぼくじつし さいちよう えごうそうじよう えごう

をたださんがために、南北十師の最頂たる慧暉僧正・慧曠

そうず えよう はっさいほっしとう ひやくうよにん め あ とぎ

僧都・慧栄・法歳法師等の百有余人を召し合わせられし時、

ほけきよう なか しよきよう なか もつと かみ あ

「法華経の中には、『諸経の中において最もその上に在り』

とううんぬん い いこんとう せつ もつと なんしんなんげ

等云々。また云わく『已今当の説に最もこれ難信難解なり』

とううんぬん い むりようぎきよう い まかはんにや けごんかいこう とう

等云々。已とは無量義経に云わく『摩訶般若・華嚴海空』等

うんぬん とう ねはんぎよう い はんにや波羅みつ だいねはん い

云々。当とは涅槃經に云わく『般若はら蜜より大涅槃を出だ

す』等云々。この經文は、華嚴經・涅槃經には法華經勝る とううんぬん きようもん けごんぎよう ねはんぎよう ほけきようすぐ

と見ゆること、赫々たり、明々たり。御会通あるべし』とせ み かつかく めいめい ごえつう 責

めしかば、あるいは口をとじ、あるいは悪口をはき、ある くち 閉 あつく 吐

いは色をへんじなんどせしかども、陳主立つて三拝し、 いろ 變 ちんしゆた さんぱい

百官 掌 をあわせしかば、力及ばずまけにき。 ひやつかんだなごころ 合 ちからおよ 負

一代の中には第一法華經にてありしほどに、像法の後の いちだい なか だいいちほけきよう ぞうほう のち

五百に新訳の經論重ねてわたる。太宗皇帝の貞觀三年に ごひやく しんやく きようろんかき 渡 たいそうこうてい じようがんさんねん

玄奘と申す人あり。月支に入つて十七年、五天の仏法を習 げんじよう もう ひと がっし い じゆうしちねん ごてん ぶつぽう なら

極

じようがんじゆうくねん

かんど

渡

じんみつぎよう

いきわめて貞観十九年に漢土へわたりしが、深密経・

けがるん

ゆいしきろん

ほつそうしゆう

げんじようい

がっし

瑜伽論・唯識論・法相宗をわたす。玄奘云わく「月支に

しゆうじゆうおお

しゆうだいいち

たいそうこうてい

宗々多しといえども、この宗第一なり」。太宗皇帝はま

かんどだいいち

けんおう

げんじよう

し

しゆう

しよせん

い

た漢土第一の賢王なり。玄奘を師とす。この宗の所詮に云

さんじようほうべん

いちじようしんじつ

いちじようほうべん

わく「あるいは三乘方便・一乘真実。あるいは一乘方便・

さんじようしんじつ

い

ごしyouかくべつ

けつじようしyou

むしyou

三乘真実」。また云わく「五性各別なり。決定性と無性の

うじyou

なが

ほとけ

な

とううんぬん

ぎ

てんだいしゆう

すいか

有情は永く仏に成らず」等云々。この義は天台宗と水火な

てんだいだいし

しyouあんだいし

ごにゆうめつ

いげ

り。しかも天台大師と章安大師は御入滅なりぬ。その已下

ひとびと

にんびにん

てんだいしゆうやぶ

見

の人々は人非人なり。すでに天台宗破れてみえしなり。

のち そくてんこうごう みよ げんしゅうた さき てんだいだいし 責

その後、則天皇后の御世に華嚴宗立つ。前に天台大師にせ

ろくじつかん げんぎよう 差置 のち にっしやうさんぞう

められし六十卷の華嚴経をばさしおきて、後に日照三蔵の

渡 しんやく げんぎようはちじつかん た しゅう

わたせる新訳の華嚴経八十卷をもつて立てたり。この宗の

詮 言 げんぎよう こんぽんほうりん ほけきよう しまつほうりん とう

せんにいわく「華嚴経は根本法輪、法華経は枝末法輪」等

うんぬん そくてんこうごう あま ないげてん 小賢 ひと

云々。則天皇后は尼にておわせしが、内外典にござかしき人

まんしん 高 てんだいしゅう 下 思

なり。慢心たかくして、天台宗をさげおぼしてありしなり。

ほつそう げんしゅう にじゅう ほけきよう 隠 たも

法相といい、華嚴宗といい、二重に法華経かくれさせ給う。

のち げんそうこうてい ぎよう がつし ぜんむいさんぞう こんごうち

その後、玄宗皇帝の御宇に、月支より善無畏三蔵・金剛智

さんぞう ふくうさんぞう だいにちきよう こんごうちようきよう そしつじきよう もう さんきよう

三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経と申す三経

渡

さんにな

ひと

ほうもん

さつきぎ

をわたす。この三人は、人がらといい、法門といい、前々の

かんど にんし

たい

ひとびと

さき

無

漢土の人師には対すべくもなき人々なり。しかも前になか

いん しんごん

渡

ぶつぼう

いぜん

くに

りし印と真言とをわたすゆえに、「仏法は已前にはこの国に

思

ひとびと

てんだいしゅう

なかりけり」とおぼせしなり。この人々云わく「天台宗は

けごん ほつそう

さんろん

すぐ

しんごんきよう

華嚴・法相・三論には勝れたり。しかれども、この真言経

およ

うんぬん

のち

みようらくだいし

てんだいだいし

責

には及ばず」と云々。その後、妙楽大師は、天台大師のせ

たま

ほつそうしゅう

けごんしゅう

しんごんしゅう

責

たま

そうら

め給わざる法相宗・華嚴宗・真言宗をせめ給いて候えど

てんだいだいし

こうじよう

たま

やみよ

も、天台大師のごとく公場にてせめ給わざれば、ただ闇夜

錦

ほけきよう

無

いん

しんごん

げんぜん

のにしきのごとし。法華経になき印と真言と現前なるゆえ

に、皆人一同に真言まさりにてありしなり。

どうほう なか にほんこく ぶつぼう 渡

きんめいてんのう

像法の中に日本国に仏法わたり、いわゆる欽明天皇の

ろくねん

きんめい

かんむ

にひやくよねん

あいだ

六年なり。欽明より桓武にいたるまで二百余年が間は、

さんろん

じようじつ

ほつそう

くしゃ

けごん

りつ

ろくしゆうぐつう

しんごんしゆう

三論・成実・法相・俱舎・華嚴・律の六宗弘通せり。真言宗

にんのうしじゆうしだいげんしやうてんのう

ぎよう

てんだいしゆう

にんのう

は人王四十四代元正天皇の御宇にわたる。天台宗は人王

だいしじゆうごだいししやうむてんのう

ぎよう

広

第四十五代聖武天皇の御宇にわたる。しかれども、ひろま

ることなし。

かんむ

みよ

さいちやうほつし

のち

でんぎやうだいし

号

にっとう

桓武の御代に最澄法師、後には伝教大師とごうす。入唐

いぜん

ろくしゆう

なら

極

うえ

じゆうごねん

あいだ

てんだい

しんごん

已前に六宗を習いきわむる上、十五年が間、天台・真言の

にしゅう やま 籠 居 ごらん

につとう いぜん てんだいしゅう

二宗を山にこもりいて御覧ありき。入唐已前に天台宗をも

ろくしゅう 責 しちだいじみな責

さいちよう でし

つて六宗をせめしかば、七大寺皆せめられて最澄の弟子

ろくしゅう ぎ 破 のち えんりやくにじゅうさんねん ごにつとう

となりぬ。六宗の義やぶれぬ。後、延暦二十三年に御入唐、

どうにじゅうしねんごきちよう てんだい しんごん しゅう にほんこく 弘

同二十四年御帰朝。天台・真言の宗を日本国にひろめたり。

しょうれつ ないしん そんな ひと む

説

ただし、勝劣のことは内心にこれを存して人に向かつてと

かざるか。

おな よ こうかい ひと のち こうぼうだいし 号

同じき代に空海という人あり。後には弘法大師とごうす。

えんりやくにじゅうさんねん ごにつとう だいどうさんねんごきちよう しんごん いっしゅう

延暦二十三年に御入唐、大同三年御帰朝。ただ真言の一宗

なら 渡 ひと ぎ い ほけきよう けごんぎよう

を習いわたす。この人の義に云わく「法華経はなお華嚴経に

およ

しんごん

及ばず。いかにいわんや真言においてをや。

でんぎようだいし みでし えんにん

ひと

のち

じかくかくだいし

伝教大師の御弟子に円仁という人あり。後に慈覚大師

号

い

じようわごねん

ごにつとう

どうじゆうしねん

ごきちよう

とごうす。去ぬる承和五年の御入唐、同十四年に御帰朝。

じゆうねん

あいだ

しんごん

てんだい

にしゆう

学

にほんこく

でんぎよう

十年が間、真言・天台の二宗をがくす。日本国にて伝教

だいし

ぎしん

えんちよう

てんだい

しんごん

にしゆう

なら

極

うえ

大師・義真・円澄に天台・真言の二宗を習いきわめたる上、

かんど

渡

じゆうねん

あいだ

はっか

だいとく

値

しんごん

なら

漢土にわたりて十年が間、八箇の大徳にあいて真言を習

しゆうえい

しおんとう

あ

たま

てんだいしゆう

なら

にほん

きちよう

い、宗叡・志遠等に値い給いて天台宗を習う。日本に帰朝

い

てんだいしゆう

しんごんしゆう

おな

だいご

して云わく「天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり。とも

じんぴ

とううんぬん

せんじ

もう

添

に深秘なり」等云々。宣旨を申してこれにそう。

その後、円珍と申す人あり。後には智証大師とごうす。

にっとういぜん ぎしんかしやう みでし にほんこく ぎしん

入唐已前には義真和尚の御弟子なり。日本国にして義真・

えんちやう えんにんとう ひとびと てんだい しんごん にしやう なら 極

円澄・円仁等の人々に天台・真言の二宗を習いきわめたり。

うえ い にんじゆさんねん ごにっとう じやうがんがんねん ごきちやう しちねん

その上、去ぬる仁寿三年に御入唐、貞觀元年に御帰朝。七年

あいだ てんだい しんごん にしやう はっせん りやうしよとう ひとびと なら

が間、天台・真言の二宗を法全・良諤等の人々に習いき

てんだい しんごん にしやう しやうれつ かがみ 懸

わむ。天台・真言の二宗の勝劣、鏡をかけたなり。「後代に

いちじやう 争 さだ い てんだい しんごん

一定あらそいありなん、定むべし」と云つて、「天台・真言

にしやう たと ひと りやう め とり ふた つばさ

の二宗は、譬えば、人の両の目、鳥の二つの翼のごとし」、「

ほか いぎ そん ひとびと そし でんぎやうだいし 背

この外、異義を存せん人々をば「祖師・伝教大師にそむく

ひと

やま す

せんじ もう

添

ぐつう

人なり。山に住むべからず」と宣言を申しそえて弘通せさ

たま

かんど

にほん

ちしやおお

せ給いき。されば、漢土・日本に智者多しというとも、こ

ぎ 破

ひと

ぎ 真

なら

の義をやぶる人はあるべからず。この義まことならば、習う

ひとびと

かなら

ほとけ

成

たま

崇

たも

こくおう

人々は必ず仏にならせ給いぬらん。あがめさせ給う国王

とう

かなら

よあんのん

覚

等は、必ず世安穩にありぬらんとおぼゆ。

よ ぐあん

ひと

もう

おん 用

ただし、予が愚案は、人に申すとも、御もちいあるべか

うえ

み

怨

ひと

聞

たも

でしだんな

らざる上、身のあだとなるべし。またきかせ給う弟子檀那も

あんのん

思

うえ

ぎ

違

安穩なるべからずとおもいし上、その義またたがわず。た

いちじょうぶつ い

かな

覚

だし、このことは一定仏意には叶わでもやあるらんとおぼ

そろうろ　ほけきょういちぶはつかんにじゅうはつぽん

きょう　すぐ

え候。法華經一部八卷二十八品には、この經に勝れたる

きょう　ほけきょう　じつぽう　ほとけ　集　だいもうご

經おわせば、この法華經は十方の仏あつまりて大妄語を

たま　けごん　ねはん　はんにや

あつめさせ給えるなるべし。したがって、華嚴・涅槃・般若・

だいにちきょう　じんみつとう　きょうぎょう　み　しよきょう　なか　もつと

大日經・深密等の經々を見るに、「諸經の中において最

かみ　あ　みょうもん　破　もん

もその上に在り」の明文をやぶりたる文なし。

ぜんむいとう　げんじょうとう　こうぼう　じかく　ちしようとう

したがって、善無畏等、玄奘等、弘法・慈覺・智証等、

しゅじゅ　巧　ほけきょう　だいにちきょう　たい　破

種々のたくみあれども、法華經を大日經に対してやぶりた

きょうもん　出　たま　いん　しんごん　うむ　故

る經文はいだし給わず。ただ印・真言ばかりの有無をゆえ

すうひゃっかん　文　造　かんど　にほん　おうふく

とせるなるべし。数百卷のふみをつくり、漢土・日本に往復

むじん

謀

せんじ

もう

添

ひと

脅

して無尽のたばかりをなし、せんじ 宣旨を申しそえて人をおどさ

きようもんふんみよう

誰

うたが

れんよりは、せんじ 経文分明ならばたれか疑いをなすべき。

露積

かわ

かわ

たいかい

ちり

つゆつもりて河となる、かわ 河つもりて大海となる、たいかい 塵つもり

やま

やま 重

しゆみせん

しょうじ積

て山となる、やま 山かさなりて須弥山となれり。しゆみせん 小事つもりて

だいじ

もつと

だいじ

大事となる。だいじ いかにいわんや、このことは最も大事なり。

しよ 造

りようほう

どうり

もんしょう

尽

疏をつくられけるにも、りようほう 両方の道理・文証をつくさるべ

せんじ

りようほう

たず

きわ

ふんみよう

しょうもん

かりけるか。せんじ また宣旨も、りようほう 両方を尋ね極めて、ふんみよう 分明の証文

書 載

戒

をかきのせていましめあるべかりけるか。

いこんとう

きようもん

ほとけ

破

「已今当」の経文は、ほとけ 仏すらやぶりがたし。いかにい

ろんじ にんし こくおう いとく

わんや、論師・人師・国王の威徳をもつてやぶるべしや。「已

破

こんとう

きようもん

ぼんのう

たいしやく

にちがつ

してんとう

ちようもん

今当」の経文をば、梵王・帝釈・日月・四天等、聴聞し

おのおの

くでん

書

留

いこん

て各々の宮殿にかきとどめておわするなり。まことに「已今

とう

きようもん

し

ひと

あ

とき

さき

ひとびと

じゃぎ

広

当」の経文を知らぬ人の有る時は先の人々の邪義はひろま

とが

きようもん

強

た

りて失なきようにはありとも、この経文をつよく立てて

たいてん

強

しゅつたい

だいじしゅつたい

卑

退転せざるこわもの出来しなば、大事出来すべし。いやし

罵

う

流

みて、あるいはのり、あるいは打ち、あるいはながし、あ

いのち

断

ぼんのう

たいしやく

にちがつ

してん起

るいは命をたたんほどに、梵王・帝釈・日月・四天おこ

合

きようじや

方

人

ぞんがい

てん

りあいて、この行者のかとうどをせんほどに、存外に天の

責きた 滅たみ 破くに 破破 法華經ほけきようの行者ぎようじや
せめ来きたつて、民もほろび、国もやぶれんか。

卑しゆご 天てん 強強 例れい 修羅しゆらが日月にちがつ
はいやしけれども、守護する天こわし。例せば、修羅が日月

吞こうべしちぶん 破いぬ 吼しし 腸腸 腐腐
をのめば頭七分いぬにある、犬が師子をほゆればはらわたくさ

いま よ見にほんこく 今、予みるに、日本国かくのごとし。またこれを供養くようせ

ひとびと ほけきようくよう くだく 伝教大師、釈でんぎようだいしして云しゃく

ほ もの ふく あんみよう っ 誇そしる者は罪ものを無間つみに開むけん

とこうんぬん 等云々。
く」等云々。

稗しゃくしづつ 飯くよう ひと 普明如来ふみようによらいとなる。
ひえのはんを辟支仏しゃくしづつに供養くようせし人は普明如来ふみようによらいとなる。

土餅 餅ほとけ 土くよう えんぶだい おう
つちのもちいを仏ほとけに供養くようせしかば、閻浮提えんぶだいの王おうとなれり。

功

たといこうをいたせども、まことならぬことを供養すれば、

だいあく

ぜん

こころ

疎

少

真

くよう

大悪とはなれども善とならず。たとい、心おろかに、すこし

もの

真

ひと

くよう

功

だい

きの物なれども、まことの人に供養すればこう大なり。いか

こころ

ほう

くよう

ひとびと

にいわんや、心ざしありて、まことの法を供養せん人々を

や。

うえ

とうせい

よ

乱

たみ

ちから

弱

暇

とき

その上、当世は世みだれて民の力よわし。いとまなき時な

こころ

行

さんちゆう

ほけきよう

孟

宗

れども、心ざしのゆくところ、山中の法華経へ、もうそう

筍

送

たも

ふくでん

良

種

お

たも

がたかななをおくらせ給う。福田によきたねを下ろさせ給

涙

止

うか。なみだもとどまらず。